



AETとの共同授業：実践報告（2）

著者	柴 茂，増木 啓二，西野 達雄，レヴンズ クリス
引用	大阪府立工業高等専門学校研究紀要，1994，28， p.121-130
URL	http://doi.org/10.24729/00007802

A E Tとの共同授業 —— 実践報告(Ⅱ)

柴 茂* 増木啓二* 西野達雄* クリス レヴズ**

A Follow-up Report on Team Teaching with an AET

Shigeru SHIBA* Keiji MASUKI* Tatsuo NISHINO* Chris LEAVENS**

A B S T R A C T

Team teaching classes of English commenced at our school two years ago. In the previous paper, 'A Survey of the Students' Attitude toward Team Teaching with an AET,' the Japanese Teachers of English analyzed the questionnaires answered by the students, and it was confirmed that their partner, the AET, had great popularity and a motivational effect as a native speaker of English. It was also recognized, however, that a considerable number of the students found difficulty in following the AET's English.

The present paper, which is newly participated in by the AET himself, reports how the teaching staff improved their second year's team teaching. It also presents their recommendations for developing students' communicative ability in English through such team teaching.

Key Words: Team Teaching, AET

1. はじめに

本校(大阪府立工業高等専門学校)にとって平成4年度は「AET元年」であった。日本人英語教師(以下、JTE)と外国人英語教師(以下、AET)による共同授業を開始するにあたって、関連文献や先行する他校の実践等を参考に臨んだものの、やはり一般論だけでは解決できない種々の問題に直面することとなった。前編(「AETとの共同授業——実践報告」本校研究紀要第27巻)では、その試行錯誤的实践の内容報告を行うとともに、アンケートの結果から、学生がAETに対してどのような感想をもっているか、どのようにAETを受け入れているのかを明らかにすることを試みた。さらにこれらを踏まえ、より有効な共同授業のあり方を探ろうとしたが、この点に関しては、一年だけで結論の出せるものではなかった。今回平成5年度の実践を扱った続編を思い立った最も大きな理由はここにある。

5年度の場合、担当者間には前年度の経験から一定

の蓄積や共通理解が得られていた。しかし、担当学年や使用教材が変わるなどの不確定要素は避けがたく、試行錯誤の部分がかかり残されていたのも事実である。本編では、5年度の実践内容を報告するとともに、学生へのアンケートの結果等を参考に、前編に続き、より有効な共同授業の在り方を模索したい。なお、今回の報告には、本校赴任のAETも直接参加している。これにより、共同授業にかかわる学生・JTE・AETの三者の意見を伝えることができるのではないかと期待する。2年間の実践とそれに対する三者の意見の総括から、前編より具体的に、より望ましい共同授業のあり方を提示できれば幸いである。

2. 共同授業の実践報告

2. 1. 平成4年度の実践報告

本校では従来から、英語の授業を講義中心の英語Ⅰと、「聞く」「話す」「書く」を主に扱う英語Ⅱに分けてきたが、AET参加の共同授業は、英語Ⅱに組み入れた。英語Ⅱの時間配当は、1～3年各週2時間となっているが、共同授業は特に低学年で有効との考えから、1・2年では全クラスが必ず週1時間は受けられるようにした。また、4年生は2週間に1時間全クラスが共同授業を受けた。その他、AETは4年生・

1994年4月11日 受理

* 一般教養科 (Department of Liberal Arts)

** 外国人英語指導員 (Assistant English Teacher)

5年生の選択演習各1クラスずつにも参加した。

4年度の実践報告では、共同授業に関して学生対象に行った2回のアンケート調査の結果を分析した。それによれば、AETに対する好感度は予想通りかなり高く、動機付けという点でAETの存在が大きな効果を持つことが確認された。反面、AETの英語がよく分かっていない学生数が相当数にのぼっていることも明らかになった。また、内容が難しくなって来た後期には、理解度・好感度ともに下降するという当初予測しなかった傾向も見いだされた。

2. 2. 1年(英語II)

2.2.1. 平成4年度の実践内容の概要と課題

実践内容については、4年度の1年担当は他の担当者であったため、その実践報告を参考にまとめる。主にビデオ教材を使用した。主として、JTE単独授業で前もって内容・表現等を理解させておいて、共同授業ではAETがその内容に関し質問したり、説明したりという授業展開をとった。ただし、この順序が逆になってしまうと、学生がビデオの内容やAETの質問を聞き取れず答えられない場面がしばしば見られた、とのことであった。

2.2.2. 平成5年度の実践報告

5年度担当者は授業計画を立てるにあたり、上記4年度担当者の報告に加え、アンケート調査の分析結果等を参考に、次のような点に留意することにした。英語IIの目標のうち1年では特に「聞く」ことに重点を置く、という共通方針に沿うこと。「分からない、答えられないから共同授業は面白くなくなった」という学生ができるだけ出ないよう工夫すること。「聞く」「話す」力の基礎を定着させるよう努めることなどである。

以下、教材および主な授業活動について具体的に報告する。また、それぞれについて学生へのアンケートの結果及びAETの意見を交えて考察する。

(1)主教材とその授業展開

教材として主に使用したのは、4年度にも使用したビデオ教材("Family Album, USA")であった。なお、JTE単独授業ではカセット・テープのLL教材も使用したが、後期になるほど、ビデオ教材のウエイトが増していった。

5年度の場合、この"Family Album, USA"は2年生でも使用している(2.3.2.(1)参照)が、1年生における具体的な授業展開は以下の手順を基本とした。

JTEの単独授業で、(a)ビデオの1つのACT(幕)を1度通して見せる。(b)難しいと思われる語句・表現とその日本語訳、内容に関する日本語による質問等を載せたプリントを配付した後、もう1度見せる。(c)ビデオを適宜止めながら見せて、日本語の質問に対する答えを回答させたり、概要説明をしたりして内容を理解させる。(d)英文スクリプト(数箇所空白にしてある)のプリントを配付する。

共同授業で、(e)ビデオを1度通して見せた後、(f)もう1度ビデオを適宜止めながら見せて、AETの英語の質問に英語で答えさせる。

次の単独授業で、(g)ビデオを見せ英文スクリプトの空白部分の英語を書き取らせる。

宿題として、(h)プリントに関連した英文を重要文としてノートに抜き出させ、その和訳も書いておくよう指示しておき、後日ノートを提出させる。

JTE単独授業で理解させてから共同授業に臨ませるといったパターンは基本的に4年度のやり方を踏襲したものである。(b),(d)のプリント配付は1年生がナチュラル・スピードに近い英語に慣れていないことを配慮し、内容の聞き取り・理解を補助する目的で行った。(h)のノート提出は、「聞く」「話す」英語の「何を勉強すればよいか分からない」「何が身についたか分からない」とする学生が多い中、学んだことを整理・定着させようという意図によるものである。

学生へのアンケート調査の結果によれば、大多数の者がこのビデオ教材のほうがカセット教材より興味を持てるとしていた。また、内容が面白いとしている学生は約2/3に達している。英語に関しては当初の予想どおり、とにかく速い・聞き取りにくいと感じたようで、前述の(b)の段階でだいたいの内容が理解できたと答えたのは12%にすぎなかった。(c)段階で理解できた者26%と合わせても、英文を見ずに理解できたのは1/3強ということになる。教材としてはやはり難しいということになるかもしれないが、ナチュラル・スピードに「慣れる」という目標のためには適当だったと判断する。また、(e)の段階で84%の学生がだいたいの内容が理解できたと答えていることから見て、少なくとも「分からないから面白くない」と感じさせない授業展開にはできたのではないかと思う。

AETはこのビデオ教材の使用について次のように述べている。

"I think we should continue using 'Family Album, USA.' It is the best suited video program that I have seen and I think it is at an appropriate level for

the students in both first and second year. The students have used in most cases boring textbooks for their whole school careers and a video is surely a welcome change. I personally prefer a video, as it helps in teaching the students to listen to everyday English at a nearly normal speed."

この教材を扱う時のAETの役割は、(f)にあるような学生との英問英答が主であった。(f)の活動は7割以上もの学生がよかったと答えており、事実AETもよく活躍していた。AETのこの教材に対する評価も上記のごとく非常に高い。ただ、授業展開に関して言えば、結果的に「聞く」力の養成のほとんどをJTE単独授業で行っていることになり、AETの活用という意味で本当に適切だったのだろうか、という思いは残った。

このビデオには各ACTごとにポイントになる文法項目や表現が設定されている。後期末には、あるACTの重要な表現(具体的には「道案内」に関する表現)を題材にした活動を行ってみた。道案内に関する表現をまとめたプリントを学生に配付し練習させた後、AETが地図を提示して学生と英問英答を行う、といった内容であった。これは、それまでほとんど別々だったこのビデオ教材と他の授業活動をうまく関連させる試みになったと思う。

一年近くこのビデオ教材を使用してみて、かなり手を加える必要はあったが、当初立てたいいくつかの目標は何とか果たすことができたように思う。この教材は、教育用素材としてすぐれており、1年生の特に「聞く」力を養う教材としても十分使えるという感触を得た。

続いて、主教材以外に共同授業中に行った活動のうち主なものについて述べる。

(2)スピーチ

スピーチは学年の最初、自己紹介のプリントに記入させ、それに基づき発表させた。AETは学生に簡単な質問をした。当初はもう一度くらいは他の話題でスピーチする機会を持たせようと考えていたが、「聞く」に関する活動等を優先させたため時間をさくことができなかった。

(3)英語のゲーム

4年度の当初は各学年でかなりゲームを取り入れていた。コミュニケーションの学習はリラックスした雰

囲気で、という趣旨だった。これに比べると、5年度は頻度が減った。短時間で、しかもある程度会話能力の育成に役立つようなゲームはなかなか見つからないので、授業活動にゲーム的要素を入れる方法を考えてみた。例えば、積極的に応答・発表をしたグループに得点を与えるというグループ対抗をやってみたが、個人の場合とは違った積極性を引き出すことができた。

(4)発音の説明・練習

学年当初、AETに主な子音・母音の発音について説明・指導してもらった。JTEの指導でも十分な内容ではあったが、AETのメリハリの聞いた説明は学生にとって印象的でよかったようである。問題点としては、教えられて理解した内容が実際に英語を話す際に生かされているとは言い難いところである。もっと実践の場面で継続的な指導をしてやる必要があると思われた。

(5)AETのsmall・トーク

授業の最初に、AETはカナダ(彼の出身国)の話しや日本での旅行や日常生活での体験談などを話した。AETが最も活躍した活動と言ってよく、学生にも好評だった。アンケート調査では、「よかった活動」「もっと増やしてほしい活動」両項目でトップであった。ただ、異文化・異なる考え方に触れることでよしとして、「聞く」力を養う活動としての工夫は足りなかったかもしれない。

(6)学生の英語による質問・応答・説明・推薦

授業内容やsmall・トークの話題に関連して、学生にAETと英語の質問・応答をさせたり、日本的な風物・行事の説明や推薦をさせたりした。やり方は内容によって一定ではなかったが、前もって指名しておき準備させることが多かった。英語で発表する経験を持たせることができ有意義だったが、JTEのほうで前もってチェックしてやる等の指導をあまりしなかったこともあってか、内容や正確さについて満足のゆく発表ができた学生は少数であった。

以上、主教材・各授業活動について述べてきたが、5年度1年英語Ⅱの実践全般をふりかえり、苦慮した点を2点挙げておく。

1点目は、「分からないから面白くない」授業にならないようにすることと「英語を聞いてその概要を理解する」力を育成する指導の兼ね合いの問題である。「聞く」力の育成のためには、AETが断言するとお

り(3.1.(1)参照), ほぼ完全に日本語を排した共同授業にすべきである。しかし一方ビデオ教材やAETの英語が分からない学生がかなりの数に上るのは事実であり(38%:1年夏の調査結果:2.5.5.図2参照), 彼らを「分からない」フラストレーションの中に放置しておくことはできない。JTE単独授業で, 補助プリントを作成してやる, ノートに整理させる等の指導が必要になった。これはJTEにとってかなりの負担であると同時に独自の授業の時間も削られることになった。また, 共同授業の場面では, AETの話した内容について日本語による説明を加えることがよくあったが, 5年度について言えば, JTEに日本語訳をもっと多くすることを望む学生が41%にのぼっていた(1年冬の調査結果)。予想以上に英語での理解に困難を感じている学生が多く, 「聞く」力の養成は容易ではないと思われるが, この結果だけをもって日本語訳を増やす方向に向かうべきではないと考える。

2点目は語彙・文法力養成の問題である。学生がうまく「聞く」「話す」ことができない場合, その原因のかなりの部分が語彙・文法の力の不足にあるように見受けられた。しかし現実には, ビデオ教材・各活動と盛り沢山の共同授業の中に特にこれらの力を養う練習を取り入れることは不可能に近かった。結果的にはこれをJTE単独授業と学生の家庭学習に求めた形になったが, それも徹底できたとは言い難く, 基本的に検討し直す必要を感じている。ただ, 英語の授業時間数の絶対的な不足やクラス・サイズの問題等もあり, どこでどのように語彙・文法力を養成するか, 対策は英語科教員の内部的努力と外的条件整備の両面から検討する必要があるだろう。

2.2.3. 平成6年度に向けての課題

これは毎年どの科目についても言えることではあるが, (1)計画性を持ち授業を系統立てて展開するようになりたい。次に重点を以下の事項に置きたい。(2)AETと協力して日本語の説明があまりなくても分かりやすい共同授業を工夫する。(3)学生がAETと直接接する機会を広く多く持たせるようにする。(4)授業中学生が主体的に練習する場面を確保する。(5)家庭でも能動的に練習・準備するように課題を効果的に与える。

2.3. 2年(英語II)

2.3.1. 平成4年度の実践内容の概要と課題

4年度の2年生の場合, 既に決定されていた英作文用の検定教科書を使用してAETとの共同授業を行わ

なければならぬという条件があった。そこで, 教科書の前半部分をJTE単独の英作文の授業, 後半部分を共同授業で使用した。ただし, 後期の共同授業では学生の「聞く・話す」能力の強化のため, この教科書を使用せず, LL教室でビデオ教材を利用したり, 英語での1分間スピーチなどをさせた。

4年度で課題として残った諸問題のうち, 主として次の2つの問題を5年度の授業で改善しようと考えた。すなわち, 教科書・教材の選定の問題と, AETとの共同授業とJTE単独授業とをどのように関連させ, AETをいかに活用するか, という問題であった。

2.3.2. 平成5年度の実践内容

前述のように, 平成4年度の場合はJTE単独授業とAETとの共同授業は別内容で独立したものであった。また, LLで学生がテープ等を使って聞き取り訓練をしている間は, AETが活躍できなかった。そこで5年度は週2時間の授業をできるだけ関連づけ, しかもAETが授業時間中十分に活躍できる方法を模索した。

英語IIは「読む」以外の活動, とりわけ1・2年では「聞く・話す」活動を行うことになるが, 本校では1年で「聞く」を中心にすることに対して, 2年は「話す」に重点を移していくことになっている。今回は, 「読む」以外のすべての活動をやってみようと考えた。

以下, (1)では教材について, (2)~(5)で共同授業の実践内容について, それぞれ学生へのアンケートの結果及びAETの意見, JTEの反省を交えて説明する。さらに, (6)では成績評価について言及する。

(1)教材

JTE単独授業は4年度の2年生が後期に使用したビデオ教材("Family Album, USA")からいくつかのエピソードを選んで使用することにした。5年度の2年生も前年度1年次に同じ教材を使用しているので続きを行うことは自然であるという理由もある。内容がアメリカの日常生活に関するものであり, 会話の流れ, 速度が自然に近いということで今回も採用した。この教材を用いて内容理解確認のための問題や部分的な聞き取りの問題等を作成した。

この教材について学生の24%は「面白い」と答えているが, 29%は「つまらない」としている。「どちらともいえない」が47%あり, エピソードの選択の仕方にも問題があったかもしれない。しかし, 同じ登場人物が繰り返し現れて, その点では変化に乏しかったことを考慮に入れると, つまらないと思った者が3割弱

は少ないと考えてもよいかもしれない。教材の会話の速さについては「速すぎてほとんどわからない」が34%あるものの、「速いがだんだん慣れてきた」が45%、「ちょうどよい速さ」が20%あり、合わせて65%、約2/3の学生が理解できる速さになっている。

AET, JTEともにこのビデオを教育用素材としては高く評価しているが、このビデオ自体は授業に使えるような練習問題等を含んでいないので、JTEが授業に使いやすいように問題等を自作しなければならなかった。

(2) スモール・トーク（「聞く」活動）

授業の最初にJTEが例えば「カナダの祝日について説明してほしい」というように話題を提供して、それについてAETが話をした。主にJTEが話題を考えたが、時事的な話題を取り入れたりしながら、難しすぎず学生が興味をもちそうな話題を毎週提供することは容易なことではなかった。

スモール・トークに関して、AETは幾分否定的な見解を述べている。

"I think we should stop having a small talk in the second year class, unless I want to tell the students about a special trip or an interesting story. If the JTE would like, he/she could ask me questions about my story and we could have a short conversation in front of the students, but this does not have to be for every class."

1クラス目は生き生きと話をしているAETも3クラス目ぐらいからは自分の話に飽きてくるのかもしれない。全部で5クラスを教えなければならないので同じ話題で話すのは苦痛であっただろう。JTEが話題を提供するだけで後はAETに話を任せてしまうということが時々あったことも否定的見解の一因なのかも知れない。AETとJTEとの会話というようにした方がよかったかもしれない。また、無理やり何かについて話してもらうのではなく、ビデオ教材や、その他の諸活動で出てくる内容について、AETとJTEが、特に事前の準備をしないで自由に話をする方が会話が生き生きとしてよいかもしれない。

スモール・トークに関する学生側の反応は肯定的なものが多い。「必要ない」という学生は14%にすぎないし、さらに「もっと長くてもよい」という答えは35%あった。学生にとってはこれは一方的に受け身的に聞いていればよい活動であるので肯定的な答えが多かっ

たと思われる。内容について半分以上理解できたと感じる者は2/3おり、聞き取りのために「効果があった」と答えた者は55%あった。

(3) トークとスピーチ（「話す」活動）

前期は学生2人とAETとの3人がクラス全員の前で2分間トークを行った。前もって学生のペアを決めておき学生に話題を考えさせ、AETが評価をした。毎週5組10人で4週間で一巡する。前期はこれを2回行った。なお、2度目はペアの組み合わせを変えた。2対1のトークにしたのは学生の緊張を少しでも和らげようという考えからである。後期前半は学生とAETとの一対一の1分間トークを別室で行った。話題は学生に考えさせた。一対一の場合、クラス全員の前では話にくいだらうと考えて別室で行った。この間、トークをしていない学生は次の項で述べる英作文の添削をした。後期後半は最後のスピーチということで、全員の前で1分間のスピーチを行った。後期はいずれも毎週10人ずつの割合で行った。

学生のスピーチやトークについてはAETは積極的に評価している。

"I think that in both first and second year, the students should give speeches, once a year for the first year students and at least twice a year for the second year students. I also feel that both first and second year should have a private conversation with me, maybe twice a year. This method of teaching has also been included in the curriculum of some of the other AET's teaching programs after I suggested it to them."

学生の反応では、「英語を話す自信をつける上で効果があった」と考える者は4割あった。この活動は一人一人の学生にとっては数週間に1度であるが、受け身的な態度では過ごせないし、準備に相当の時間を要し、非常な緊張を強いられ、学生にとって一番つらい活動だったと考えられる。

(4) 英作文の添削（「書く」活動）

前述のスピーチやトークを行う場合、まだまだ事前書いたメモ等を見ないでできる段階ではないので、英文が書けるかどうか、スピーチの出来を左右することが多い。できるだけ正確な英文を書けるということは「話す」活動にとっても重要なことである。そこで、平成4年度の2年生の学年末試験で書かせた100

語程度の自由英作文からJTEが適当なものを選び、ワープロで清書してプリントとして配付した。AETは教材提示機を使用して英語による説明をしながら添削をした。JTEは必要に応じて日本語による説明を行った。前期中間試験以後は前年度の2年生の作文ではなく現2年生のものを採用した。どの作文を採用するかについては、特に優れたものではないが、比較的出来のよいもので学生が誤りやすい英語が含まれているものを選んだ。自由英作文は、定期試験毎に試験日の10日ほど前に3~4の話題を学生に提示してその中から自由に選ばせた。辞書等の持ち込みはできないので、自分の作った英文を覚えておかなければならない。後期前半は、前述の1分間トークの間に、学生各自が辞書等を使って添削をした後、答えさせながらAETが説明した。後期後半は大分慣れて来たこともあったので、学生に添削する時間を前もって与えないで答えさせた。学生が正解を答えた場合は評価に加えた。

自由英作文の添削についてAETは次のように述べている。

"I think that we should continue with the free English compositions, but I do not want to correct each paper as this would be of little benefit to the students' English. I think we should have the students correct their own compositions or have their partners correct their compositions. Having their partners correct their compositions might be the most effective method or we could do the same procedure as last year."

AETは4回の定期試験の度に5クラス200名の自由英作文の評価をしなければならなかった。これはAETにとって苛酷な仕事であったと思われる。評価をするのが精一杯で、試験を学生に返却するまでに200枚の作文を添削するのは不可能であった。AETの言うように学生間で添削をさせるのは学生の英語能力から見て疑問を感じるが、試行してみる価値はあるだろう。授業における英作文プリントの添削については49%の学生が「英語を書く上で効果があった」と答えている。

(5)ビデオ教材の内容に関するQ&A(「聞く・話す」活動)

JTE単独の授業で行ったビデオ教材の内容に関して、AETが質問し、答えが分かった学生に手を挙げて答えさせた。既知の内容についての質問であり、プ

リントを見てもよいことにしているので、これは学生にとってそれほど困難な活動ではない。

ビデオ教材についてのQ&Aで、抵抗なく「手を挙げて答える」ことができる学生は4割以上いるものの、3割の学生は「手を挙げて答えることには抵抗があるので指名してほしい」と思っている。学生の積極性を引き出すことを考えてのやり方であったが、一度も答える事なく終わってしまう学生がいるので、ランダムにできるだけ漏れなく指名する方法に変える方がよいと考えている。

(6)定期試験及び成績評価

定期試験はビデオ教材の内容から5割、ディクテーション2割、自由英作文を3割の配点で出題した。ディクテーションはビデオ教材の内容から2問をJTEが作成し、スモール・トークの内容などから2問をAETが作成し、AETがテープに吹き込みを行った。試験中にテープ・レコーダーを教室に持ち込み、5クラス同時に行った。採点はJTEが担当した。自由英作文は前述のとおりであるが、AETが採点し、A~Fの6点刻みで6段階で評価をした。

定期試験以外にトークやスピーチ等をAETが評価したので、AETが成績評価に関与する割合はおおよそ1/3である。

2.3.3. 平成6年度に向けての課題

ここでは前節で述べられなかった反省点についてのみ言及する。

今回の授業方法において最も大きな問題点は学生に「聞く」面で家庭での学習をさせることがあまりできなかったということである。試験前だけテープを聞いたものが約5割で、何もしなかったものが4割に達していた。4年度における1年生のようにShadowingをさせるには授業時間に余裕がなかった。また、NHKのテレビ・ラジオ等の英語講座を利用している者はほんの一握りの学生であるので、家庭での学習を促すための動機づけをする工夫が必要であろう。

「話す」の面でも今回の授業方法の場合、どうしても練習不足になってしまうので、次年度はペア・ワークやグループ・ワークを積極的に導入する必要があるだろう。

2.4. 3年(英語II)

2.4.1. 平成5年度の実践報告

中堅学年として、英語を理解し表現することにおける正確さ(accuracy)にスピード(fluidity)を加え

ることを目標とし、とくに、まとまりのある文章を短時間に読んでその大意を把握する速読の訓練と、聴解力養成を重点課題に設定した。

授業展開としては、週2時間のうち、1時間を速読訓練に、残りの1時間を聴解訓練に当てた。AETは担当授業時数の制約から隔週で聴解力養成の授業に参加することになった。(以下、聴解力養成の授業に関してのみ述べることにする。)

教材については、前期はいわゆる総合教材の“NEW COLLEGE ENGLISH COURSE”(桐原書店)の中の対話教材を、後期はNHKの「テレビ英語会話Ⅰ」を使用した。

授業の進め方はおおむね次の様であった。

(1) JTEの単独授業のとき

文字(スクリプト)を見ずに教材の概要を把握できるまでの聴解訓練をする。

(2) 共同授業(1週間後)までに

持ち帰った教材テープを文字で確認しながら何度も繰り返し聞き、その中の表現が使えるようになっておく。

(3) 共同授業のとき

各自で練習した成果をAETとの質疑応答や対話等で発揮させる。

2.4.2. AETの反応

共同授業に対するAETの評価は以下の通り。

- ・学生と会話する時間が足りない。学生はAETと直接話をするのを望んでいるので、もっとその時間をとるべきである。
- ・NHKの番組教材は学生のレベルに適当であり、内容も気に入っている。

2.4.3. 考察

AETは、スピーキングを格別重視した授業でないことを承知の上でスピーキングをもっと重視すべきだと述べている。相手の話を聞くことなしに会話は成立しないとの考え方から、従来からリスニング力は言わば「スピーキング力の副産物」と考えられてきた。しかしながら、最近ではリスニングを一つの独立した技能と捉え、スピーキングと切り離して考える立場が主流となってきている。それを反映させた結果のリスニング訓練によるリスニング力養成を中心に据えた授業展開であったが、教材が対話であるということを考えるとAETの意見がまさに当を得ている。「対話の理解(リスニング)は(AETとの)対話の中で」という一つの示唆を与えてくれたようである。

同時に、「スピーキング力はスピーキング練習によって」ということもあらためて痛感した。学生はAETとの会話に備えての聞き取り練習から各自のテープとスクリプトによる個人練習を十分に行って授業にのぞむことになっていたが、蓋を開けてみるとその成果が十分に活かしているとは考えにくい状況であった。換言すれば、学生が個人的に行った(はずである)疑似会話練習(manipulation)は、あくまでも疑似のレベルで終わっており、「実戦」にはなかなか結び付いてこないようである。やはり、スピーキングをとってみても、「実戦」すなわちAETと直に接して自分の英語が通じる喜びを味わうチャンスをできる限り与えてやるのが大切であると感じた。

2.5. 2年間の共同授業実践の総括

続いて、平成4年度・5年度、2年間の共同授業の実践全般について項目別に総括を試みる。

2.5.1. 学年配置

共同授業の配置は「低学年からの継続指導」ということで、1～3年の英語Ⅱに組み入れることで落ち着いた。AETの授業担当時間数に上限がある関係で、時間数の面で不満はあるが、与えられた時間内でAETを最大限有効に活用すべく、試行錯誤を重ねてきた。

2.5.2. 教材・授業活動

複数の教員が使用してきたビデオ教材など、使える教材はいくつか見つかった。かなり手を加える必要はあったものの、蓄積もできてきた。今後、オーラルコミュニケーションを扱う検定教科書なども登場し教材の選択肢は増してくると思われるが、いずれにしても、各担当者間での情報交換・成果の蓄積が必要だと痛感している。

教科書に関連したり、あるいは離れて、定期的、あるいは投げ込み的に、様々な授業活動を行った。これらは最もAETの活躍する場面であった。今後もこのような授業活動を充実させる方向で行きたいが、まとまりに欠けていた面もあったので、いかに系統立ててゆかが課題となるだろう。

2.5.3. 指導法・評価法

共同授業ではどのような指導法が有効か、これは最も試行錯誤を要した課題であった。この点については、各JTEの教授観の違いなどの要素もあり、現時点では、一般論として述べる段階には達していない。教材の場合と同様に担当者間の交流が必要と思われるが、

特にAETとの協力関係が重要なので、AETと十分な意志疎通ができるかどうかは鍵になると思われる。

「聞く」「話す」を扱う英語Ⅱとはいえ、評価は定期試験のペーパーテストによるところが大きくなるざるをえなかったが、AETの話に関連して試験問題を出したり、AETの英語をテープに吹き込んだ聞き取り問題を取り入れるなどの工夫は行った。AETに関して言えば、この他にも「英作文の採点をする」「面接テストを行う」「質問に答えた学生に平常点を与える」などの形で評価に直接参加した。これは、評価が学生の学習態度に大きな影響をもつことから、AETもできるだけ学生に分かる形で評価に参加するのがよいと判断したためであった。今後も、基本的にAETの評価への参加は拡充させてゆくべきだと考えるが、その場合には、どの程度まで、どのような項目について参加してもらうか、検討が必要だと思われる。

2.5.4. JTEとAETの協力関係

本校のAETは赴任後すぐに、学生、教職員によく溶け込み、良好な人間関係を築いた。共同授業に関するJTEとの協力関係においても基本的には良好であった。両者の役割分担については、教材準備や授業展開の大枠などの計画立案は主にJTE、それに従って実際の授業を行うのは主にAET、という形が多かった。授業に関して意見やアイデアを出し合う、授業中両者の英語による対話を学生に見せる、などのいわゆる「共同」作業も行ったが、結果的にはあまり多くの時間をとれなかった。両者の協力関係は意志疎通を欠くことがなかった点、おおむね良好だったといえるが、細かい打ち合わせや突っ込んだ議論をしておけばと思うことがあったことは否めない。

2.5.5. 学生の感想・反応

以上、2年間の共同授業の取り組みについて述べたが、学生はどんな感想を持ち、どのように反応したのだろうか。2年間にわたって学生に対しアンケート調査を行ったが、主な項目についてここでその傾向を分析してみたい。

まず、4年度・5年度共にほぼ同様の傾向を示した項目について述べる。図1にあるように、共同授業に対する好感度は高く、拒絶反応を示す者はごくわずかである。その理由としては、AETの人格、楽しい雰囲気、生の英語や欧米の文化に触れられる、などが挙げられている。刺激を受けて学習意欲を増した学生も出てきている。ただし、どうしても後期になるほど共同授業に対する好感度は幾分下がる傾向が見られる。

図1：共同授業は好きか？

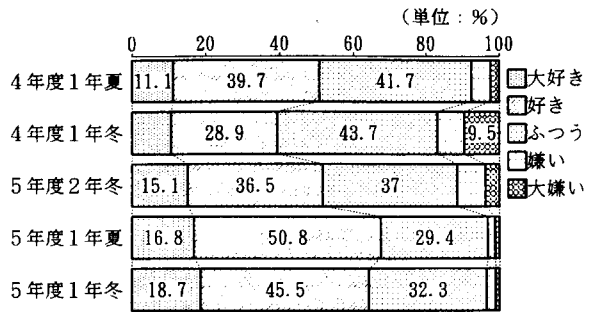


図2：AETの英語は？

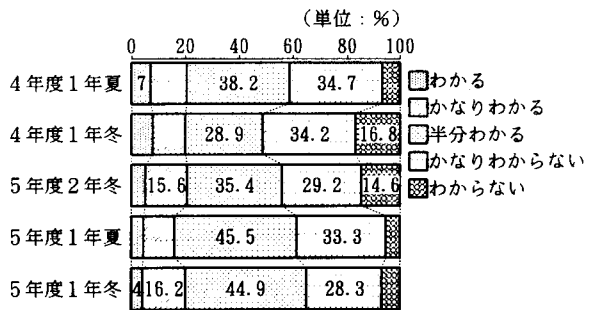
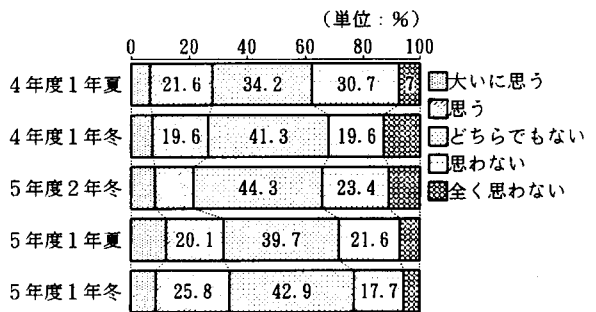


図3：AETと会話したいか？



平成4年度は1・2・4年生を対象に夏・冬計2回、多数の項目にわたってアンケート調査を行った。5年度は、夏は1年生対象に4年度と同じ項目で行った。冬の調査では、これらの項目の中から5項目を共通項目として1・2年生に行ったが、上図はそのうち3項目を扱っている。なお、各学年ごとに担当者が各自の授業に関する質問項目を付け加えている。この結果は各実践報告の中で触れている。

これは、AETに対する目新しさがなくなってくることで、課題が難しくなってくるのがその原因としてあげられるだろう。好感度が高い割に、AETの英語がよく分からないと言う学生がかなりの数に上っている(図2)。そして、よく分からない学生が増えるほど、共同授業に対する好感度が低くなる傾向も見られる。AETと積極的に会話してみたいと思う学生の数

は残念ながら多くはない(図3)。

続いて、4年度と5年度で傾向の違う点を挙げる。4年度は好感度とともに英語の理解度も低下したのに比べ、5年度は、好感度は低下したが理解度はわずかだけだが上昇している。これは、AET・JTE両者の1年間の共同授業の経験が生かされた成果と見なしでもよいかもしれない。ただし、両者が学生に対する要求度を低くした結果ともとり得るので、今後の学生の学習姿勢等を注目しなければならないだろう。

3. AETの提言とJTEの課題提起

ここでは、2年間の共同授業の実践を通して得られたAETの意見やJTEの反省をもとにして、これからの共同授業のあり方について若干の提言と課題提起をしてみたい。

JTEとAETとは2年間の授業を終えた後、話し合う機会をもった。始めにAETの提言を示し、次いでJTEの立場から考察し、さらにJTE側からの課題提起を行いたい。

3. 1. AETの提言

AETは「会話英語を効果的に教えるために」次に上げる6つの提言をしている。

(1) Stop or greatly restrict the use of Japanese in the classroom. Japanese may be used if necessary, but only if there is an impasse and the lesson cannot continue without some kind of clarification in Japanese.

(2) Have the students give speeches to the class at least twice a year. We might also try to have the other students listen for mistakes and maybe even grade the speeches.

(3) Have the students meet with the AET for a private conversation twice a year. The other students could be preparing some other work while these meetings are going on.

(4) Have the students discuss situations or answers in pairs. This might make them more comfortable about speaking English

and also more confident.

(5) Create a situation where the AET and JTE can have a conversation about a topic that the students are studying using the appropriate vocabulary and grammar.

(6) Have the students create a skit or short play about a situation in everyday life. We can use videos or texts to present them with examples and appropriate vocabulary.

以上の提言はいずれももっともなものが多く、実現を目指したいが、導入に当たって問題が生じる場合があるので、JTEの立場から問題点を指摘しておきたい。

(1)の母国語を使用せずに教えることは理想であると思うが、特に低学年の場合には慣れていないこともあって消化不良を起こす可能性がある。学生が不安な顔をし、直接日本語でJTEに説明をしてほしいという態度を示すと、つい日本語で説明したくなってしまふことがある。日本語の使い過ぎに注意しなければならない。

(2)のように学生ができるだけ多くの機会をとらえてスピーチを行うのはよいことであるが、学生同士で間違いを探せるほどに聞き取り能力があるか、あるいはスピーチを行う学生の発音は正確なのか、学生には日本的英語の方がよく分かり高い評価を与える可能性がある等の問題があり、評価を学生にさせるのは相当慎重にしなければならない。

(3)で述べられているような、AETと個別に話をする機会をもつことは学生の会話力育成にとって非常に効果的と思われるが、難点は一度に一人しか相手にできないということである。かなりの時間がこの活動に取られてしまうので他の活動とのバランスを取るのに困難を生じ易い。

(4)ペア・ワークは学生の能力が十分にあれば問題なく優れたやり方であると思うが、初級の段階から導入できるかどうかは疑問が残る。

(5)はぜひ、多用してみたい活動である。

(6)の活動は学生自身の創造性を引き出し、非常によい活動だが、レベルの高いものであるので、導入の仕方によっては大きな困難を伴うだろう。

3. 2. JTEの課題提起

前記のAETの提言では言及されていないことについてJTEからいくつかの課題を提起する。

(1)「教室英語」を習得させる

AETの発言が分からないままに授業を受けていて消化不良状態になる学生が多い。このため、例えば、“I don't understand.”や“Could you speak more slowly?”のように、JTEを介することなく、AETに直接英語で質問をしたり、繰り返して言ってもらえる等の表現を学生がいつでも使えるように、特に初級の段階で、常に教室の目につくところに掲示しておくなどの方法で、習熟させておくことは大変重要である。

(2)正しい(標準的な)発音の訓練を行う

できるだけ早い機会に英語らしい英語の発音を身につけさせる。このため1年生の始めに特に日本語にない発音、日本語では区別されない発音などを認識させておく必要がある。自分の発話において発音の区別ができないと聴解能力の強化も困難である。

(3)コミュニケーションに必要な語彙・文法の提示

いわゆる「文法・訳読」方式による英語学習には問題点もあるが、学習すべき事項が比較的明確にされているため、学生にとって勉強しやすい面があるのも事実である。「コミュニケーション」に関しても、必要な語彙・文法を整理・系統化することが急務であると思われる。そして、これを段階的に学生に提示し学習させることで、もっと着実なコミュニケーション能力を育成できるのではないかと考える。

(4)クラス・サイズを小さくする工夫

いかに多く授業中に学生に話をさせるか、また学生に授業への参加意識をもたせる、という観点から、40人のクラス・サイズは大きすぎる。せいぜい20人までが望ましいが、現在の教育体制ではこれを実現することは困難であろう。そのため40人のクラスのままで20人のクラスと同じ効果をもつような授業方法を考える必要がある。

(5)ゲーム等による学習意欲向上の工夫

クラス・サイズの問題に関して、ペア・ワークやグループ・ワークは有効であるが、単調なものになると意欲や能力に欠ける学生は何もせずにやりすごしてしまうことになりかねない。そこで、言語活動を促進するようなゲームをやってみる、普段の授業活動にゲーム的要素を取り入れてみるなどの工夫も必要である。

また英語の歌・劇などの表現活動も学習意欲の向上につながると思われる。

(6)家庭学習の促進

AETから受けた英語学習への刺激をその場限りのものにさせないためにも、家庭学習に結び付ける適切な指導が必要である。準備・練習した成果をAETや他の学生に対して発表させる機会を増やすことが有効だと思われる。授業中に学習したことを確実に定着させるためには、適切な復習課題を内容・範囲を明確にして学生に課す必要があるだろう。また、ともしれば授業に関連した事項のみで終わってしまいがちな家庭学習指導だが、テレビ・ラジオの英語講座を利用するようアドバイスするなどの指導は、特に意欲をもつ学生に対しては有効であり、自発的な家庭学習を促進する上で忘れてはならない方策である。

4. おわりに

平成4・5年度の共同授業は試行錯誤の部分も多かったが、これからの英語教育を考える上で大いに参考になった2年間でもあった。6年度からは「オーラル・コミュニケーション」という新しいカリキュラムが実施されこれに沿った教科書が使用されることになるが、これをいかに活用できるかが新たな課題の一つとなる。更なる挑戦をしてみたい。

最後に2年間の共同授業に対するAETの感想でこの論を締めくくる。

"I am glad that I have been given the opportunity to discuss some of my ideas about team teaching. I hope that some of these ideas can be incorporated into our team teaching methods. The students seem to know quite a lot of English vocabulary and grammar. We should build on those strengths and make the students feel more comfortable using English."

参考文献

長岡 慧・柴 茂・増木 啓二・西野 達雄：「AETとの共同授業——実践報告」, 大阪府立工業高等専門学校研究紀要第27巻, pp. 141-152